

令和6年度 厚生委員会行政視察報告書

厚生委員会
委員長 久保 大憲

1 視察期間 令和6年10月1日（火）

2 視察先及び視察事項

（1）富山市恵光学園

「令和6年能登半島地震による被害状況及び復旧業務について」

「子どもの発達支援の取組内容について」

（2）富山市民球場

「令和5年度の整備状況について」

「施設の概要について」

3 視察参加委員

委員長 久保 大憲

副委員長 岡部 享

委員 柏 佳枝

〃 澤田 和秀

〃 高原 譲

〃 豊岡 達郎

〃 吉田 修

〃 高田 真里

〃 高田 重信

4 随員職員

議事調査課議事係長 土方 智樹

議事調査課主任 澤井 将

5 視察概要

富山市恵光学園

(1) 視察事項

- ・ 令和6年能登半島地震による被害状況及び復旧業務について
- ・ 子どもの発達支援の取組内容について

(2) 視察の目的

恵光学園は、心や身体に発達の遅れが心配されるゼロ歳から就学までの子どもを対象とした児童発達支援センターである。また、他の機関と連携しながら、早期発見、早期療育、機能訓練、相談支援等を行う、地域の療育センター的役割も果たしている。当該施設における子どもの発達支援の取組内容について理解を深め、今後の委員会活動の参考とするもの。あわせて、令和6年能登半島地震による被害状況とその対応について調査し、委員会活動の参考とするもの。

(3) 取組の概要

恵光学園は、県内に5か所ある児童発達支援センターの1つで、昭和48年に開園し、今年で51年目を迎える。定員は開園当時30人であったが、制度改正による全国的な定員割れや平成10年の併行通園、相互利用制度の導入などを経て、現在の36人となった。

「手をそえ、目をそえ、心をそえ、こどもひとり一人の発達と家族の幸せを願って」の基本理念の下、毎日通園する中でたくさんの遊びを経験し、子どもの成功体験を積み上げていくことで情緒の安定を図り、運動機能の発達、生活習慣の確立、集団参加への意欲、コミュニケーション手段の獲得等を促している。

そのための具体的な取組として、食事や排せつ、衣服の着脱など日常生活動作の支援を行う生活訓練や、自由遊びを通して社会性や言語などを伸ばすプレイセラピー、隣接する桜谷保育所との交流保育、児童一人一人の目的に応じた専門職による様々な機能訓練などが実施されている。

加えて、保護者が子どもの発達の度合いを正しく知り、早期に療養していくためのプログラムであるポーターゲル乳幼児教育プログラムを導入し、チェックリストを基に支援目標を選び、それが達成されていくようスモールステップでの支援を行っている。

発達に遅れのある子どもを適切に養育するに当たっては家族の発達の遅れへの理解や受入れが大切であることから、保護者向けの様々な行事や研修会の開催、ペアレントトレーニング、兄弟児支援などにも取り組んでいる。

児童発達支援センターとしての取組以外にも、児童発達支援事業や障害児相談支援事業、保育所等訪問支援事業など、提供する支援は多岐にわたるが、切れ目ない障害児支援を行うに当たっては、療養施設から学校へ、そして就労へというステージの移行や、医療、教育、福祉という分野間での連携が課題となっている。

これからの児童発達支援センターの役割として、障害の種別に関わらず身近な地域で

支援を受けられる体制を整備し、専門性のある人材を配置することが求められている。

10年後のビジョンとして、職員全員がおのこの専門的知識と技術を身につけ、他職種間でも共通言語のように連携できるようになること、保護者や関係機関、他事業所から頼られる施設となること、専門的人材を育成することを目指している。

なお、現在の施設は建築から29年が経過しており、以前から壁にひびが入るなど老朽化による破損が見られていたが、令和6年能登半島地震によりひびがさらに広がるなどの被害が出ており、現在はテープを貼るなどして対応しているとのことであった。

（４）所感

〔久保委員長〕

恵光学園では様々な取組を行っており、その成り立ちからも、市は現場の声にもっと耳を傾け支援すべきだと感じた。特に地域療育の拠点としての役割は将来的に重要性を増すことから、計画的に人材を育成するためにも支援の在り方について検討したい。また、施設を内覧したが、施設の老朽化が進んでおり、令和6年能登半島地震によって一定程度の被害も見受けられた。施設側からは狭隘化により増築したい旨の要望も受けたことから、委員会として注視していきたい。

〔岡部副委員長〕

心や身体に発達の遅れが心配される子どもや医療的ケア児まで、未就学児を対象に支援を行っている恵光学園を視察した。学園では「手をそえ、目をそえ、心をそえ」で、子ども一人一人の発達と家族の幸せを願って支援活動が行われており、例えば就学前にトイレで排せつができるように指導するなど、きめ細やかな支援を行っているとのことであった。一方、指定管理者による運営であることから、施設改修などの予算がなかなか認められないなどの理由から、令和6年1月の能登半島地震による爪痕が各所に残っていた。子どもを預かる施設の安全対策は設置者である市の責務であり、早急に対応すべきだと感じた。

〔柏委員〕

今回の視察を通して、現状や取組について多くのことを学ばせていただいた。心と身体の発達の遅れが心配な子どもを対象に、発達支援として大変多くの取組を行い、療養センターとしての大事な役割を果たしていることを認識した。現状の課題として、福祉サービスの認知度が低いことや人材不足なども挙げられていた。また今後の取組として、居宅訪問による児童の発達支援事業を積極的に行いたいとの話があり、家族の思いに寄り添う支援としても必要性を実感する。人材不足が大きな課題であるとのことだが、さらに充実した支援ができるように後押ししていきたい。

〔澤田委員〕

恵光学園では、様々な障害を持った子どもたちの成長を見守りながら、一人一人に寄り添った療育を行っている。発達障害には多種多様な症例があり、それぞれの特性や課題に応じた対応が求められる。こうした個々のニーズにしっかりと向き合い、子どもた

ちの可能性を広げていけるよう成長をアシストしている。さらに重度の障害を持つ児童も多く通っており、その症例は非常に幅広い分野にわたる。

現在の建物や設備では、こうした多様なニーズを完全に満たすには十分とは言えず、特に重度障害の児童が安心して学び、成長できる環境の整備が求められる。

〔高原委員〕

子どもたち一人一人が安心・安全でいられる場所づくりを目指し、医療・教育・福祉の連携、地域社会との共生を大切にしている施設である。利用者の多様なニーズを関係機関や社会資源とうまくコーディネートされており、職員の仕事に対する情熱といろいろな障害を持った子どもたちの生き生きとした姿は印象的であった。これからも子どもたちや市民に愛され、親しまれる大切な施設としての役割が期待される。誰もが安心・安全な社会生活を送るために必要な障害福祉サービスの拠点施設であると実感した。今後も「こどもまんなか」実現のための大切な施設と考える。

〔豊岡委員〕

恵光学園では、ゼロ歳から就学までの発達の遅れが心配される子どもを対象に発達支援を行っている。なかなか人の中に入っていけない子どもが勇気を持ってこの学園に通うようになったことで、今までできなかったことができるようになった事例もある。仲間がいる中で、基本的な動作やコミュニケーションを取る訓練に根気強く取り組めるこのような環境は大変有効であると思う。また、クラス分けを行い、運動したり座学での学習をしたりとローテーションで教室を利用する工夫によって、教育の効率がよくなっていると思った。

〔吉田委員〕

初めて恵光学園を訪問した。ゼロ歳から就学までで、なかなか言葉が出ない、落ち着きがない、心や身体に発達の遅れが心配される子どもたちの療育とよりよい成長のお手伝いを実践されている話を施設長から聞き、施設の果たしている役割の大きさを実感した。

こども発達支援室との連携により、早期の専門的な対応など、本市の支援対応が進歩していると感じた。今後とも、専門職のスキルアップの努力を期待したい。

〔高田 真里委員〕

切れ目のない障害児支援に様々な角度から取り組んでいらっしゃることに改めて敬服した。7職種の支援員それぞれが共通言語で連携できる環境を目指しているが、それを阻むもの、例えば教育分野における福祉サービスへの理解や、医療と福祉の一元化へのハードルなどを克服すべきだと感じた。また、少子化が進む一方で、障害のある子や発達支援が必要となる子、医療的ケア児の割合は増加しており、社会課題として、保育者である母親を中心に、より寄り添ったケアが求められているのではないかと思った。いずれにしても、今後、支援員の確保や負担軽減も含め、課題解決に向けた具体的な取組を要する。

〔高田 重信委員〕

恵光学園においては障害の状態によって多様な支援事業に取り組んでおられ、子どもへの支援はもちろん、保護者の悩みや不安を相談できる大切な施設であることがよく理解できた。

説明の中で、子どもたちが活動する部屋のスペースが狭いことや職員の環境にも課題があることをお聞きし、そうした課題を改善し、切れ目のない支援体制を充実させていく必要性を感じた。あわせて、恵光学園の持っている知見を一般の保育所等に少しでも実践してもらえるよう、講習会等のシステムが構築できるよう当局に提言していきたい。

富山市民球場

(1) 視察事項

- ・令和5年度の整備状況について
- ・施設の概要について

(2) 視察の目的

富山市民球場（アルペンスタジアム）は、平成4年7月に開設された北陸地方初の全面人工芝の野球場として、県内における中核的な野球場であり、プロ野球や高校、学童などのアマチュア大会などに幅広く利用されており、令和8年7月に開催されるプロ野球オールスターゲームの試合会場となることが決定している。令和5年度の照明更新業務を含む整備状況及び施設の概要を視察し、今後の委員会活動の参考とするもの。

(3) 取組の概要

富山市民球場は、整備以来30年が経過し、老朽化が進んできたことから、これまでも計画的な改修を行ってきた。令和5年度は水銀灯の生産が中止となったことを受け、今後の安定した供用と消費電力量の削減を図るため、屋外照明の更新を行った。

屋外照明の更新内容としては、まず、屋外照明塔全6基を水銀灯からLEDに更新し、それに伴い不要となった既存照明設備を撤去した。また、プレー環境を考慮した照度や均斉度、グレアの規定に加え、周辺への影響を抑制するため、漏れ光への配慮を規定した。あわせて、上記基準を満たすことを前提として灯数を540台から270台へ削減するとともに、スケジュール制御を含む照度の調光制御に加え、演出性の向上を図るためのDMX制御方式を導入した。

効果としては、環境負荷の低減及び電気料の削減を図ることができたこと、ワンタッチ制御によって、プロ野球、アマチュア野球、メンテナンスや片づけ時などの利用シーンに応じた調光が可能となった。また、演出性が高まり、野球はもとより様々な利用を促すことが可能になったことなどが挙げられる。

(4) 所感

〔久保委員長〕

アルペンスタジアムでは、照明や音響、電光掲示板など計画的に更新がなされており、視察時には人工芝の張り替えの最中だった。車椅子の方の観戦場所を設けるなど、様々な工夫をしていた。古い和式のトイレの割合が多いが、数が少ないので、プロ野球オールスターゲーム開催に向けてトイレの改修が必要だと感じた。一方で、過度な設備投資は回収が困難で、観客が多く入るイベントも少ないことから、イベントの誘致や仮設トイレ、移動式トイレの設置なども検討するよう市に働きかけたい。

〔岡部副委員長〕

2026年7月のプロ野球オールスターゲームに向けて照明塔や人工芝等の改修が進められているアルペンスタジアムの各施設の現状を視察した。予算の関係から毎年少

しずつ改修が行われているが、ライブなど野球以外のイベントにも活用できるように観客席を増やしたり、機材搬入のための動線を確保したりするなどの大規模な改修を行い、収益を上げるような検討が必要であると感じた。また、トイレが汚い、多くのトイレが和式で使いづらいという意見を野球観戦した女性から聞いており、実際に見せていただいたが、早急に改修すべきであると思った。張り替えた人工芝の再利用は、大変よい取組であると思う。

〔柏委員〕

富山市民球場の老朽化に伴い、計画的に整備が進められる中で、2026年7月に富山市民球場でプロ野球オールスターゲームが開催される。今回は球場の整備状況について視察を行った。

照明器具については整備が完了し、視察時には人工芝の張り替え作業と内野グラウンドの水はけをよくするための工事が行われていた。現在、観客席にはエレベーターがないため、車椅子で来場された方が大変な思いをされている状況を伺った。その他の課題として、トイレの多くが和式であることやWi-Fi環境がないことが挙げられていた。様々な検討を重ねているとのことであるが、全ての皆さんに快適に楽しんでもらえるよう、さらに環境整備を進めていただきたい。

〔澤田委員〕

プロ野球オールスターゲームの開催に向け、現在、球場設備の大規模な改修工事が進められている。フィールドでは、選手のパフォーマンスを最大限に引き出すことを目的として、人工芝の全面張り替えを行っていた。最新の人工芝を採用することで、プレー中の安全性が向上し、選手にとって快適で、けがのリスクを抑えた環境を提供できることが期待されている。

また、スタンドの改装にも着手しており、観客がより快適に試合を楽しめるように座席の配置や障害者席の改良も計画されている。

照明設備についても、従来の照明を全面的に最新のLED照明へ更新した。LED化によって、エネルギー効率の向上やコスト削減が期待されるだけでなく、試合中の照明演出の幅が広がり、選手と観客の両方にとって視覚的な快適性が向上した。

〔高原委員〕

スコアボードの全面LED大型ビジョン化、ナイター照明のLED化、ラバーフェンス張り替えと計画的に整備が進み、現在は人工芝の張り替えを行っていた。これらは2026年7月のプロ野球オールスターゲームを見越したものである。

30年近く前にアルペンスタジアムで行われたプロ野球オールスターゲームの印象は強烈で、今も鮮明に覚えている。市民があの感動をもう一度味わえることはすごいことである。富山市の未来を担う子どもたちが観戦できる機会を設けるなど、ぜひ大いに盛り上げていかなければならない。また、今後の施設運営を考えると、野球のみならず多様な場面で活用していく必要がある。

〔豊岡委員〕

富山市民球場は照明が新しくなり、人工芝の張り替え中であつた。ただ球場を照らすのみではなく、特別なケースで照明を点灯させるなど最新の機能を持ったＬＥＤ照明は素晴らしいと思った。市民の方にアピールできれば、来場者も増えてなおよいと思った。車椅子など障害者の方も観戦できるが、まだ十分な対応がなされていないところもある。幾つかの素案について説明を受けたが、今までよりも能率的に観戦できるように変更されるとのことであつた。障害者の方も抵抗なく野球観戦に参加してその楽しみを享受できるように、改善を後押ししたいと思った。

〔吉田委員〕

富山市民球場の視察は２回目であつたが、今回は屋外照明が水銀灯からＬＥＤに更新され、電気料金の大幅な削減効果があつたとのことであつた。また、演出効果を高める調光技術も導入され、野球だけでなくイベント等への利用拡大が期待される。

障害者用の観客席を大幅に増やす計画が立てられていることも重要である。観客席の拡張も望まれるが、大きな予算を要し、すぐに実現できないことも理解できる。

〔高田 真里委員〕

屋外照明塔を水銀灯からＬＥＤに更新した際に、灯数を半減できたことや長寿命化できたことは評価すべきである。また、点灯のみならず、照度の調光制御や演出性の向上を図るためのDMX制御方式の導入は、様々なシーンに活躍することを想像でき、プロ野球の試合数が少ない中で、他のイベント計画を大いに奨励していくべきだと感じた。

トイレの環境としては、球場の内外ともに和式中心であり、早期改善の必要性を感じた。

また、車椅子利用の観客向けの工事も進められていたが、観客席に上がる階段は、昇降機ではなく通路の一部に長いスロープを設けることで、短時間に昇降が可能となり、幼児などにも適応できると感じた。

〔高田 重信委員〕

現在老朽化した施設の改修を順次進められており、２年後に開催されるプロ野球オールスターゲームの誘致に向けてふさわしい施設となることを期待している。視察当日は人工芝の張り替え作業が進められていた。

施設をじっくり見ていくと、外壁塗装の剥がれやトイレの洋式化の遅れなど気になる点も散見された。財政状況が厳しい折であるが、知恵を出し合って、スポーツのよさや野球の楽しさ等を伝えるすてきできれいな魅力ある施設にするために、整備を怠ることなく進めていかなければならないと考える。

令和6年10月1日（火） 富山市恵光学園



富山市民球場

